

## 第2回小田原市総合教育会議での主な意見

- 1 日時 平成27年10月22日（木）午後2時00分～午後3時30分  
場所 小田原市役所 3階 全員協議会室
- 2 出席者の氏名  
加藤 憲一（市長）  
吉田 眞理  
栢 沼 行 雄（教育長）  
萩原 美由紀（教育委員長職務代理者）  
和田 重 宏（教育委員長）  
山口 潤

### ○大綱の構成等について

- ・ 教育の基本的な施策を位置づけている現在の「教育振興基本計画」が平成29年度までになっている。平成30年度からは、新しい計画なることから、具体的なものについては、そこで盛り込むような形になる。具体的なものは振興計画の中で、見直しの中で位置づけていくと方向にさせていただきたい。
- ・ 重点目標をどのように組み立てるかが一つの見せ所だ。

### ○基本目標「自立したひとづくり」について

- ・ 全ての命が与えられた資質なり、花を開かせる為に教育という人づくりがあるということを最初に謳ったらどうか。
- ・ 人づくりの目的が「社会に貢献できること」であることはとても大事なことだが、まず、その人が生き生きと、自分らしく、人生を喜びを持って暮らしていることがあり、仕事をすることに生き甲斐を持って働いていくことが、社会に貢献することになる。
- ・ 社会貢献をしてもらうために人をつくっているわけではなくて、一人ひとりが人生をいきいきと生きる。それが結果として、社会が生き生きとしたものになっていく。その順番が伝わるような文章だと良い。
- ・ 社会的な役割の中では、仕事を持ち継続して働くことが自立した人というイメージになるが、働けない事情を持った方々もいらっしゃる。「どんな人でもその可能性を最大限に発揮する」などの言葉を入れてはどうか。
- ・ 人を育てることのゴールが仕事を持つこととなると、それが厳しい方もいらっしゃる。その人が精一杯生きられるような形で、教育が出来たら良い。
- ・ “じりつ”には、「自分で立つ」と「自分で律する」の両方ある。どちらを使うか少し慎重に考えたい。
- ・ 「ひとづくり」に重点を置くとともに、あらゆる人達を受け入れることの出来る社会環境をきちんと作っていく必要がある。

## ○家庭教育について

- ・ 家庭・地域・学校・行政が並列して書かれているが、その関係性としては、第一義的に「家庭」でしっかり子供を教育していただき、その補完や環境としての「地域」があって、「学校」として学校教育の面をしっかりやっていく。「行政」はそれをバックアップするという関係性ではないか。
- ・ 児童福祉法では、児童の権利に関する条約でも、まず一義的に「家庭」というのを置いている。現在、家庭の力、家族の力が弱くなっている状況にあり、第一義的に家庭でしっかりとした教育を行うということを入れられたら良い。
- ・ 何が教育の土台であるかを考えていくと、「生活力」であるとか、そこに由来する「肉体・身体」等であり、今それらが疎かになっていることが問題なのではないか。
- ・ 土台となるものの上に、その子が持っている力を伸ばすという意味での「学力」や、関わる力、困難に向き合っていく「コミュニケーションの力」があるのではないか。
- ・ 「生活力」など家庭や生活に纏わる部分で形成されていくことをもっと大事にしていくことや、この部分において地域との連携していく部分を、もう少しハッキリと表現した方がよい。
- ・ 就学前も含めた子ども子育て、家庭教育への支援は、ある程度強く打ち出した方がよい。
- ・ 家庭教育が大切と言いながら家庭教育という言葉は無い。

## ○基本目標「小田原の地ならではの教育」について

- ・ 小田原市内には色々な地域があって、それぞれ独自の良さがあるので、「多様性」という言葉を持ってくるのは、とても良い。
- ・ 障がいがある無しに関わらず、男女に関わらずという言葉を使うよりは、「人の多様性を認め・受け入れていく」という言葉が入ると良い。
- ・ 大綱のキーワードに「多様性」という言葉が入ってくると、広がりが出てくると思う。地域の多様性、人の多様性、小田原市の中での地域の多様性、住んでいる人の多様性、働き方とか生き方の多様性など、重要な言葉ではないか。

## ○各学校の教育目標・小田原らしい教育

- ・ それぞれの小学校の教育目標に、小田原の地域にある学校として、こういう教育をしていきますという特徴が出てきていると良い。
- ・ どの学校の教育目標も素晴らしいが、「地域性」はあまり出てこない。どんな地域の学校で、どのような小田原らしい教育をしているのかが、伝わってくると良い。
- ・ 「未来に繋がる学校づくり」などで、学区にある人的資源や環境的な資源を活かしたプログラムを実施しているので、個別に見ていくとかなり小田原らしい教育をしている。
- ・ 教育目標が総花的なものではなく、うちの学校はその上にこれをのせているというものが出てくると、教育大綱と合わせて、小田原らしい教育の全体像が見えてくる。
- ・ 教育目標を具現化するために、各学校では「重点目標」を決めていて、その中にかなり学校の地域性を出した目標なり、重点を掲げている。
- ・ 教育目標とともに重点目標を出せば、小田原らしい取組みがご理解いただけるのではないかと。

## ○尊徳学習について

- ・ 「小田原の地ならではの教育」としては、小学校4年で尊徳学習を進めている。小学校だけでなく、中学校でも尊徳の学習が授業でも展開していくなど、小・中一貫した形の学習体系を今後構築していく必要がある。
- ・ 尊徳学習などは、「小田原の徳を生かす教育」という言い方もできるのではないかな。

## ○基本目標「オール小田原による教育」について

- ・ 「社会包摂」ということと、「様々なひとが皆で教育というものを考え、関わっていく」という二点を盛り込んでいきたい。
- ・ 「一人はみんなのために、みんなは一人のために one for all、all for one」は、今は流行りでも5年後どうなっているのか心配であり、これに近い言葉が他にあれば検討してほしい。
- ・ 「一人は皆のために、皆は一人のため」ということは、非常に重要な概念だが、あまりラグビーっぽくならない方がいいのではないかな。
- ・ ラグビーの話が出て来たが、川崎の事件や宮川の事件を見ると、結局、人の繋がりが切れて、一体感が無いという。特に「地域の子ども」という考え方が、非常に希薄になっている。
- ・ 教育大綱を作る目的は、義務教育だけではないので、「児童・生徒」という言葉よりは、「市民誰でも」という意味で考えたい。
- ・ 「地域総ぐるみ」など、教育活動の基本単位に即した表現の方が良いのではないかな。
- ・ 全ての児童・生徒が輝けるということを大事にしていきたい。
- ・ インクルーシブ教育については、基本的には支援教育の理念を基とし、共生社会の実現に向け、障がいのあるなしに関わらず、出来るだけ全ての子ども達が同じ場で学び、或いは育ちが出来ることを目指すことを小田原で大事にして進めていくべきであり、この考えを大綱に盛り込みたい。
- ・ 障がいのあるなしに関わらず、どの子も通常級で学べる、同じ場で学べる、そういった教育的配慮をさらに強く推し進めていかなければいけない。
- ・ 環境整備、学校の施設等も含め、今後はユニバーサルデザインという視点に立って、障がいがある子たちが学習できる環境をどのようにデザインしていくのか、共生社会に向けて重要なことになるだろう。

## ○人権や命を守る教育

- ・ 人権や命を守る教育、子どもも大人もそれぞれに自他の生命を尊重し大事にすることを盛り込みたい。
- ・ 基本方針に「命」という観点を明確に入れた方がよい。その際、全ての子どもたち、市民がということも含めて、観点をはっきりさせるべき。

## ○重点方針について

- ・ 全体的に、子どもの教育に特化された感じがある。生涯教育とか幼児教育とか取り上げられていない。もう少し生涯教育とか幼児教育が入ってくると、全体の大きい表と重ね

合わせて読むことが出来る。

- ・ 「生きる力」というものを構成する、幾つかの重要な要素、学力的なもの、コミュニケーション力、生活力、身体等の観点から、中身を整理し置き直していくと良いのではないか。これらと、いくつか外側との関係、学校の在り方、学校と外の地域の在り方、地域と本人の在り方などを5番以降で重点的なものを整理する。大きな構造としては、そのような配置で良いのではないか。
- ・ 「小田原らしさ」については、それを受けるような重点方針があると良い。小田原は各地域性に根ざした取組している。教育長が掲げる新しい理念を据えて、新しい局面にも入ってきているので、既存のものを整理するというよりは、改めてそれらを捉え直し、新しい概念でそれぞれを括ってあげられたら良い。それは、「命」、「生きる力」、「生活」、「地域」といった概念ではないか。

### ○学力について

- ・ 「確かな学力」の項目がないが、盛り込む必要がある。
- ・ 「確かな学力・豊かな心を育てます。」というのが基本目標になるのかも知れない。重点目標の中に「知」が入ってくれば良い。
- ・ 「自立した人づくり」の中に位置づけをして、確かな学力と豊かな心と健やかな身体をそれぞれ重点方針という形で、位置づける形の方が好ましいかもしれない。

### ○アウトリーチについて

- ・ 市内の小学校でアウトリーチや、様々なワークショップを実施しているが、大変良いことだと思う。
- ・ アウトリーチは、小学生3年生以上でなく、もっと小さいうちに様々な経験をしてみれば、小学校3年生になった時の価値観みたいなものが変わるのではないか。
- ・ 就学前なども含め、アウトリーチをもっと低年齢化させて広げていくことは大事なことでないか。

### ○放課後対策について

- ・ 学校の範疇の中では、放課後子ども教室や放課後児童クラブなど、小学生の放課後対策の充実を図ることが謳われていると良い。

### ○地域コミュニティの拠点としての学校について

- ・ 地域コミュニティの拠点として活用できるような施設改修整備を計画的に推進するという文言が謳われていると良い。
- ・ 学校が地域コミュニティの拠点となっていくことを、はっきりと打ち出していくと、今後の姿が見えてくる気がする。
- ・ 学校が地域コミュニティの拠点として位置づけられる際、先生方には授業力や教師力だけではなくて、地域と協働する力、学校内から外に向かったような、視野を広げるような先生方を育てる必要がある。ソフト面でも、地域コミュニティの拠点として住民の方と先生がしっかりした関係を築き、子どもたちもその姿を見て育つという良い効果が得られるのではないか。
- ・ 家庭・地域・学校が対等の関係で知恵を出し合いというところで、要は学校が受けての

側も能力を高めるといったところで位置づけさせていただきたい

- ・ 地域コミュニティの拠点としての学校、そこに勤める先生方のあり方は、「チームとしての学校」へと進めていかなければならない。そこでは、これまでは教職員だけの学校ではなく、企業、地域の方、ボランティアの方など、様々な方々が子どもに関わっていくような非常に多様な職員構成の学校だろう。それゆえ職員に求められるのは、「チームとしての学校」にどう関わるのかという資質や能力が求められる。

### ○幼児教育について

- ・ 「子どもたちが安心して学べる豊かな教育環境づくりを進めます」のところで、就学前の子どもたち0才から6才までのお子さんを育てる親子に対し、ソフト面での推進、安心して子育てが出来るなどの言葉がここに入ると良い。
- ・ 幼児教育においては、命の根っこを育てるような部分、基本的な生活習慣、生活リズム、生きる喜び、人とのコミュニケーションの楽しさ、人間への信頼感などを育てていくこと、養護と教育との両方をやっていたことが大切である。
- ・ (6)では、「子どもたちが」という事で位置づけをしまっているが、「誰もが」という形にして、幼児から社会人になる前までの長いスパンで見た教育環境づくりというように形にし、「その時期に応じた」という流れにして、まとめてはどうか。
- ・ 教職員の研修等の授業力や教師力の向上とあるが、これは環境づくりと言えれば環境づくりですが、知・徳・体、全部に関わるものである。「学校施設等の改修をしていきます」とか、「就学前教育をやっていきます」とかいう部分と違って、先生の指導力を高めますというのが、学校の中だけに入ってしまう気がするので6番にあっているのかどうか。

### ○発達段階に応じた教育

- ・ 年齢段階、発達段階に応じた教育が、特に明示的には盛り込まれていないが、土台を作っているもの、何歳までにはこうゆうものが非常に重要で、何歳までにこれをやらないといけないというのは、ある程度あるだろう。そういった事を少し反映したようなものが出せると良い。

### ○小田原の地ならではの教育に対応するもの

- ・ 基本目標で「小田原の地ならではの教育」が出ているが、重点方針の中にあまりその辺が扱われていない。重点方針の方にも、もっと盛り込まれた方がよい。

### ○食育について

- ・ 「食は健康で豊かな生活を送るための基本である」とあるが、食育というのは、同時に育てるといふ部分が入るのではないか。

### ○働くことにつながる教育

- ・ 育てるといふことは、同時に働くという事に繋がっていく。それをどのように全体の中に盛り込んでいくのが課題だ。
- ・ 「仕事」と「働く」はイメージとして少し違う。小学生の時期の家事手伝い等が、実はベースにあるのではないか。私たちの子ども時代は、お手伝いが物凄く重要で、無償での働きだった。
- ・ この頃、お金に特化した「仕事」ということが、教育中で強く言われすぎて、引きこも

りの人達などが、かえって社会参加出来なくなっているという状況がある。これをどのように教育の中に盛り込むのが難しい。高校生や大学生では、インターンシップや雇用ということになる。